

”飢え”の思い出

松本 篤弘(まつもと あつひろ) 78歳

昭和 16 年(1941)12 月 8 日、日本軍のハワイ真珠湾攻撃で開戦、太平洋戦争に突入した。そんな戦下の昭和 18 年 1 月 16 日に私は豊中市岡町で生まれた。翌年の 12 月 19 日、大阪は最初の空襲を受けた。空襲警報を聞いた時に、母は赤ん坊の私を背負い長兄と次兄の手を引いて近くの防空壕に飛び込んだ。母は途中で財布を落としていたことに気が付いたが、探しに行けないのでヤキモキした。父三郎は東京へ出稼ぎで留守がちであった。

戦局は悪化一。父は思い余った末、一家を故郷の兵庫県神崎郡川辺村(現・市川町)に疎開させた。姫路から播但線に乗り継ぎ約 40 分、列車内は疎開する乗客でデッキは鈴なりであった。田圃の中に農家が点在する。前方に中国山脈の支脈が穏やかに盛り上がり裏には市川が流れ、直ぐ後ろには播但線が通り、小高い山が迫っている。世話になる家は父の兄(私の伯父)が家長とする分家で決して裕福とは言えなかった。本家から分け与えられた田畑だけでは生活が苦しかった。生野銀山から飾磨港まで銀鉱物を運搬する生野鉱山道(現 312 号線)沿いにあり、立地条件を考えて酒、煙草の販売を兼業とした。母は子供たちに自分のご飯を分け与えようとする、「メンメ^注の物はメンメが食いな!」と家長に叱咤され、居候の母は小さくなっていた。姫路は空襲にさらされ、空が真紅に染まった。

終戦のとき、私は 3 歳であった。岡町の家は幸いにも空襲の被害が無かった。一息つく暇もなく、戦後の厳しい生活が始まった。「戦争犯罪容疑者」、「失業者対策」、「焦土日本」、「宴会禁止令」、

「食料デモ」など新聞の見出しが示すように、戦争の後遺症が尾を引いた。父からの毎月の仕送りが途絶えるようになった。ひもじい思いに耐えられず、次兄にくっついて神社の椎の木に登り実を捕って神主に叱られた。隣の遊び友達を誘って屑鉄拾いに出かけ、ある程度集まると屑屋に売った。真鍮(しんちゅう)だと鉄より値段が高かった。30 円ほど手に入ると2人で山分けし、お菓子を買って空腹を満たした。外来種のアメリカザリガニも曾根の小川から捕ってきては私が料理をした。オスの腹に見られる青い血管には毒が含まれると聞き、削り取ってから油で炒めた。母は、和服を仕立てる内職をしていたが、栄養失調で、目が見えにくくなり、仕事は捗(はかど)らなかった。私は、目の病に効くと言われたドジョウを母に食べさせたいと思い、服部緑地まで遠い道のりを歩いて行った。5匹ほどを空き缶に入れて帰る途中、悪ガキにドジョウを盗まれ悔し涙を流した。母には心配をかけないようにそのことは話さなかった。

以来、困難なことにぶつかっても、当時の苦しみを思い出しては奮い立たせている。

約 70 年経ったいま、コロナ下で、当時の私と同年代の子どもたちが、自由に課外活動が出来なくなっている。この辛い体験を将来に活かしてもらいたいと願っている。

*注:メンメとはこの辺りの方言で「自分」